「エチカ」ゼミ　第20回レジュメ

2022年11月1日　大谷隆

0　範囲

第四部　人間の隷属あるいは感情の力について
定理四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇

1　自己満足

興味深かった項目。

> 定理五二
> 自己満足は理性から生ずることができる。そして理性から生ずるこの満足のみが、存在しうる最高の満足である。

字面としても面白い。「自己満足」のラテン語原文は「acquiescentia in se ipso」で「自分自身で安心」といったようなものか。日本語の「自己満足」はあまりいい意味で使われないが、そのズレの面白さも相まっている。

スピノザ的に読むと、

1　自己一満足は、自己のみから生ずる。
2　言い換えれば、能動である。（自己のみを原因とし、外的なものを原因に含まない）
3　自己の「真の活動能力」から生ずる。
4　つまり理性であり、感情（その他の原因を含む）ではない。
5　これが最高の満足。

となる。イメージ的には「他人を追い出した無菌室」を思わせる。

もちろん、この「自己満足」が直ちにスピノザ自身の思想とは言えないのはいつもの通りで、

> 定理五七　備考
> 私がこれらの感情（高慢・自卑）ならびにこれと類似の諸感情を悪と呼ぶのは、ただ人間の利益を念頭に置く限りにおいてであるということはすでに述べたところである。これに反して自然の諸法則は、人間がその一部分にすぎない自然の共通の秩序に関係している。このことを私はここでついでに注意したいと思う。
>
> 私は、第三部の序言で述べたように、人間の諸感情およびその諸特質をその他の自然物と同様に考察する者である。そしてたしかに人間の諸感情は、人間の能力を表示するものでないに

> しても、少なくとも自然の能力および技巧を表示するものであって、その点は、我々が驚嘆しかつその観想を楽しむ他の多くのものと何ら異なるところがないのである。

「人間の利益を念頭に置く限り」での「最高の満足」であり、神即自然の秩序からすれば「その他の自然物」と同様に並べられた限定的な状況に過ぎない。スピノザからすれば「人間の利益を念頭に置く」というのはあるいは「狭量な人間中心主義」といった感じなのかもしれない。

2　謙遜

謙遜（自劣感）についても興味深い。

> 定理五三
> 謙遜〔自劣感〕は徳ではない。すなわち理性からは生じない。

これも日本語としての「謙遜」のニュアンスとラテン語とのズレによるものがあるのかもしれないが、結果的になかなか深いことを考えさせられる。一般に、謙遜は感情的というよりはむしろ理性的な振る舞いに分類されるが、言われてみれば感情的かもしれない。

余裕のある場面では謙遜は理性的な雰囲気があるが、なにか本当に芯を喰った状況では、謙遜は「徳」とは言えず、むしろ「逃げ」や「及び腰」のニュアンスに傾く。この場合の「謙遜」は、先回りした防衛であり、本質的には恐れの感情の発露の一形態に過ぎないような気もする。本当にその人にとって何か重要な地点では「謙遜」によってではなく、もっと素直な発露によってむしろ「徳」を感じさせることがあるように思う。ただ、それが「理性」なのかと言われると難しい。「感情か理性か」の二項対立ではうまく言いにくいもののようにも思える。

3　目的・境界・限界・結末

第四部序言を読み返して、「目的finis」を考える。

> 我々は自然が目的のために働くものでないことを第一部の付録で明らかにした。つまり我々が神あるいは自然と呼ぶあの永遠・無限の実有は、それが存在するのと同じ必然性をもって働きをなすのである。事実、神がその存在するのと同じ本性の必然性によって働きをなすことは我々のすでに示したところである（第一部定理一六）。したがって神あるいは自然が何ゆえに働きをなすかの理由ないし原因と、神あるいは自然が何ゆえに存在するかの理由ないし原因とは同一である。ゆえに神は、何ら目的のために存在するのではないように、また何ら目的のために働くものでもない。すなわち、その存在と同様に、その活動もまた何の原理ないし目的も有しないのである。（神即自然）9
>
> ところで目的原因と呼ばれている原因は、人間の衝動が何らかの物の原理ないし第一原因と見られる限りにおいて人間の衝動そのものにほかならない。

ラテン語辞書では、

finis
1境界（線） 2領域、国土、地所 3制限、限界 4目的、目あて、意図 5極度、頂点 6結末、終局

「目的」という意味が4番目であること自体も興味深いが、日本語的にはそれぞれかなり違った意味合いの語彙が並んでいる。目的・境界・限界・結末などを相互に結びつけるためには、それなりの思考過程が必要になる。例えば「目的というのはなにかを達成するゴールのことであるのだから、すなわち結末を意味する」「結末はそこで終わる以上、それ以上先はないということだから「ここまで」という境界や限界を示す」など、ある特定の通路を使えば相互に関連がつけられるが、同一と呼べるほど近い場所にあるわけではない。

一方、ラテン語では同一語であるため、例えば「目的論」という言葉は、実は日本語としては「境界論」「結末論」とも訳しうるということになる。ちなみに英語のteleology目的論はギリシャ語のtelos（目的・終極）＋logosであり、ラテン語と同様に「目的論＝終極論」のニュアンスを持っている。

これらを念頭にもう一度、序言を読む。強調は引用者。

我々は自然が目的のために働くものでないことを第一部の付録で明らかにした。

第一文の意味の日本語訳をfinisの複数の意味で並列化とすると、

a 自然は目的をもっていない。（辞書項目4）
b 自然は領域をもっていない。（辞書項目2）
c 自然は限界をもっていない。（辞書項目3）
d 自然は意図をもっていない。（辞書項目4）
e 自然は結末をもっていない。（辞書項目6）

といった意味合いになる。

この並列化された自然の非finis性は、その後つづく序文の文章で確認される。

つまり我々が神あるいは自然と呼ぶあの永遠・無限の実有は、それが存在するのと同じ必然性をもって働きをなすのである

「永遠・無限」とは、finisを「3限界」「6結末」と捉えると直ちに導かれるが、この文自体が前の文を言い換えているに過ぎない。

4 目的と衝動

さらに序言を読み進める。

ところで目的原因と呼ばれている原因は、人間の衝動が何らかの物の原理ないし第一原因と見られる限りにおいて人間の衝動そのものにほかならない。

「衝動」は、一般に目的性が薄い。

しょう-どう【衝動】の解説（デジタル大辞泉）
1 外から強い力や刺激を受けて心を動かすこと。
2 動作または行為を行おうとする抑えにくい内部的な欲求。目的が完遂することによって消滅する。「叫びたい―に駆られる」「―を抑える」

１の意はまさにスピノザ的な部分的原因のことである。また2の意をとれば、序言の「人間というものが一般に自己の衝動の原因を知らないからである」という文につながる。「目的なるものを衝動と解する」というのは、人間は自らが目的に向かって意図的（finis的）に行為している（能動）と思っているが、外からの力や自らでは抑えにくいものによって行為している／させられているという連携になる。

序言の例でいうと、「家屋の目的は居住することだから、人は家屋を作る」という人間行動を、「人が何らかの、自らは意識しにくかったり忘れてしまったりする衝動や欲求から家屋が作られている」とスピノザは解する。この場合「衝動」は、家というものの起成原因（家が生じて成立する原因）である、となる。

家の目的があり、その目的に向かって人が作る、のではなく、人に家を作らせる何らかのきっかけ（起成原因）があって、その結果、家が作られる、という順序になる。イメージとして、ゴールの情景というよりは、スタートの情景に着目している。

以上